

# 10 process in architecture exhibition

——これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35の存在を考察する。



2010年、U-30として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家や出展者の一世代上の建築家と議論することで、あらたな建築の価値を批評し共有しようと召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国の地方区分で影響力を持ちはじめ新たな活動を行っていた建築家・史家である、東より、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壯介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志や、九州地方の塙塙隆生など、中部と四国を除いた、日本の6地域から集まつた。そして開催初年度に登壇した、三分一、塙塙など1960年代生まれの建築家から、開催を重ねるごとに1970年代生まれの建築家・史家が中心となる。3年後の2012年には、8人の建築家（五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壯介、2013年より、芦澤竜一、吉村靖孝）と2人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）による現在のメンバーにより開催を重ね、9年が経つ。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約10年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう当初に試みたのだが、この10名が集まつた4年目の開催の時期に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーが位置づけられていった。そして同時に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出演した若手建築家との出会いうのは開催前年度の2009年。長きにわたり大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりである全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に出向き、27組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表する出展者7組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しながら自薦による公募を開始し、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、オーガナイザーを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考の二段階審査方式であった。また海外からの応募もあったことから2011年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧洲出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塙塙由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり1年目は完全指名、2年目の2011年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催5年目の2014年である。完全公募による審査を始めた初代・審査委員長を務めた石上が、自らの年齢に近づけ対等

な議論が交わせるようにと、展覧会の主題であった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 8 年が経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の 2015 年、公募開催第 2 回目の開催であったが、審査委員長を務めた藤本が、はじめてのゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」と評した。しかしこれにより大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出する「伊東賞」が、隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年の出展者となるシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢もそうだが、プログラムが徐々にコンポジット化し続いているのが、本展のあり方のようだ。2019 年に 10 年間の開催を終え、基盤をつくり準備を整えた本展が、あらたな 10 年を目指そうとした 2020 年に発生したコロナ禍での開催という大きな試練の中、今年も無事、本展は 12 回目の開催を迎えた。

この出展者の一世代上の建築家・史家たち 10 名が一同に揃った昨年のシンポジウム開催後に場を設け、2022 年に開催 13 年目を迎える今後の U-35 のプログラムについて存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、2017 年より開催している。今回の一昨年、昨年の審査委員長を務めた倉方俊輔と谷尻誠、2021 年開催の審査委員長を務めた吉村靖孝、そして来年の審査委員長を務めることになった芦澤竜一を中心に、第 5 回目の「10 会議」を開催した。



—— この開催が継続するエンジンのような、恒例の「10 会議」をはじめさせていただきます。この会議は、出展者の一世代上の建築家・史家たちが一同に揃うシンポジウム開催後に場を設け、U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように、展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、毎年審査委員長を務めていただいた先生を中心に議論を進めていただいております。それでは第 5 回目の「10 会議」を開催いたします。開催当初より本展の当番をしてくださっている平沼先生、本日も進行の補足応答をどうぞよろしくお願ひいたします。あらためまして長時間にわたり、本日も大変、お疲れさまでございました。またこの情勢の続く中でも、奇跡的に開催ができましたことを感慨深く感じています。12 年目の U-35 2021 記念シンポジウムをただ今、終了させていただきました。まずは今年の出展者を振り返り、印象をお聞かせください。出展者の選出の際、大変悩まれながら、本日 GOLD MEDAL を決定された、吉村先生よりお願い致します。

吉村：応募資料で選ぶときは、情報が限られているので非常に悩みました。でも会場で展示物を見れば、図面も模型もありますし、会場の構成の仕方自体にも建築家の資質みたいなものが現れているような気がしたのでそんなに迷わず選びました。ただ、いざ GOLD MEDAL 選出となるとシンポジウム会場に入る前からとても悩んでいました。シンポジウムの議論の行方によっては、結果とは違う作品になる可能性もありました。

平沼：展示作の工事種別は、更地への新築と同一敷地内の増築と室内のリノベーション、現在実現していないアンビルド作がありましたが、今回の審査に影響しましたか。

吉村：いや、あまり種別は考えていませんでした。それほど大きな仕事をやっているわけではないし、小さなものの中で解像度を高く、試行錯誤している状態での比較だったように思います。これらの作品が正直、どの程度の飛距離があるかという点は、今回だけでは分かりません。それぞれにテーマのバラエティが存在して、環境に向きあう姿勢が、僕たちに近いような気がします。それぞれ強引な印象ではなく、優しいなあと思いました。

一同：そう、優しいね。

平沼：来年の審査委員長を務められる芦澤さんがどのように考えられるのか分かりませんが、吉村さんは今回、人を見たのか作品を見たのか、両方なのか、教えてください。

吉村：「作品は見てない」と言つたら叱られるかもしれません、実際に見に行き、体験した作品はひとつもありません。「つくる人の頭の中はこうなっているんだろうな」ということを間接的に想像する。建築を通して、建築家として何を考えているかを想像し、その解釈を共有するということです。U-35は建築家を選ぶ会で良いのではありませんか？

藤本：リアルに出来上がった建築だけが建築家の全てではないし、出展作を通じてどのように想像したか、共有体験ができるることは素晴らしいですね。僕ら同じ建築家たちが集まっている意味も含めて吉村さんの発言は素晴らしいし、さすがですね。

—— 昨年、一昨年の審査委員長を務められた倉方先生、谷尻先生、どのような感想をお持ちでしょうか。

倉方：展示のクオリティが年々増してきた印象を持っています。建築展の展示は、「建築を展覧会でどうやって見せよう」かと、試行錯誤を重ねてきた集積を見ているように思います。受け手側への伝達意識も蓄えられた展示の構成に配慮があるのも印象的でしたし、クオリティがまた一步、高まったのだと思います。それはひとえに、今年の審査委員長を務められた吉村さんが良く選んだということでしょう。

吉村：（笑）そう言つていただけると、悩んだ甲斐がありました。

倉方：（笑）予めの情報が少ない公募から4名を選出されたのは、はじめてのことでしょう。そしてあれだけのバラエティとクオリティが揃っているというのは、吉村さんの持つ、ディレクションの才能というか力量と知見が、会場の、あの空間を可能とした。本当に良い展覧会で、一人でも多くの方に見てもらいたいなと思いました。

藤本：公募が4つなんですね。それがすごいです。

平田：誰が推薦枠だったんですか？

平沼：今年、推薦枠で出展された中では、板坂さん、榮家さん、鈴木さん。それ以外は公募です。

藤本：アーキペラゴは、公募だったっていうことですか？

平沼・吉村：はい、そうです。

藤本：鈴木さんは優秀で、とても楽しみですね。あとアーキペラゴ、あいつらはやばいですね（笑）。

倉方：彼らは凄くなるだろうね（笑）。

藤本：あと宮城島さんは五十嵐淳さんが推薦されていましたよね？

五十嵐淳：何年か前ですね。

藤本：北海道の方ですね。

平沼：宮城島さんは2020年に淳さんが推薦していますが、谷尻さんに落とされています。

一同：アハハ（笑）

平田：なるほど。それはそれで、個性という思想ですからね。

平沼：はい、榮家さんも谷尻さんに落とされています。



一同：わはは（笑）

平沼：吉村ディレクションの展覧会としても、見ることができました。

倉方：やはり吉村ディレクションという感じですね。

倉方：そう、一体的なディレクション感が出て、グループ展の意味を感じることができました。ある種の共通性もあるように思えたし、個別に頭も刺激する展覧会だなと思いました。

藤本：ほとんどリベンジで選出されていた年なんですね。良いですね。

芦澤：来年の審査委員長を務めるプレッシャーを感じてきましたが、13回目となる来年の展覧会に向けて、どのように選出方法を備えていくのがよいのでしょうか。

平沼：ちなみに本日の GOLD MEDAL を受賞した板坂留五さんは、吉村さんが推薦して、これも谷尻さんに落とされています。

谷尻：皆さんも同じだと思いますが、選出のテーマを持つことでしょうか。僕の場合は、設計手法やプロセスより、結果的に、気持ち良い空間になっていてほしいという気持ちがありました。さすがに設計表現のクオリティは高いけれど、それが本当に気持ち良い空間に落としこまれているかと言うと、やや怪しいと感じました。本当は現地に行き体験しないと分からないのですが、それでもその1歩前に「そこに行ってみたい」とか「感じてみたい」と思わせてくれる作品の応募であつたかどうかを見るようにしていました。最終的には、何とも言いうのない雰囲気や空気感みたいなものが漂うものだと思います。設計力、紙面のクオリティにある程度の高さがあつても、空間性を語るには、まだまだだと感じる。それはきっと僕らも同じで、そこをずっと目指し続けるべきだと思いますが、そういうところのゴール地点のあり方みたいなものは、今一度、応募する時点で彼らも考え直すべきで、僕らもこういう機会を通じて、考え続けるべきだなあと思います。

一同：ガハハハッ（爆笑）

藤本：結果として見返すと、おもしろいですね。

谷尻：弁解をさせてもらいますと、書類選考でみた印象と展示と本人から受ける印象が全く違うじゃないですか。今日の展示やシンポジウムでは、榮家さんのことを良いなあと思ってしまったのです。だから直接お話を聞けたのは良かったですが、皆さん、応募書類を整える時に、もう少し頑張って印象づけてほしいです。

平田：年ごとに対抗がいますし、タイミングにもりますね。

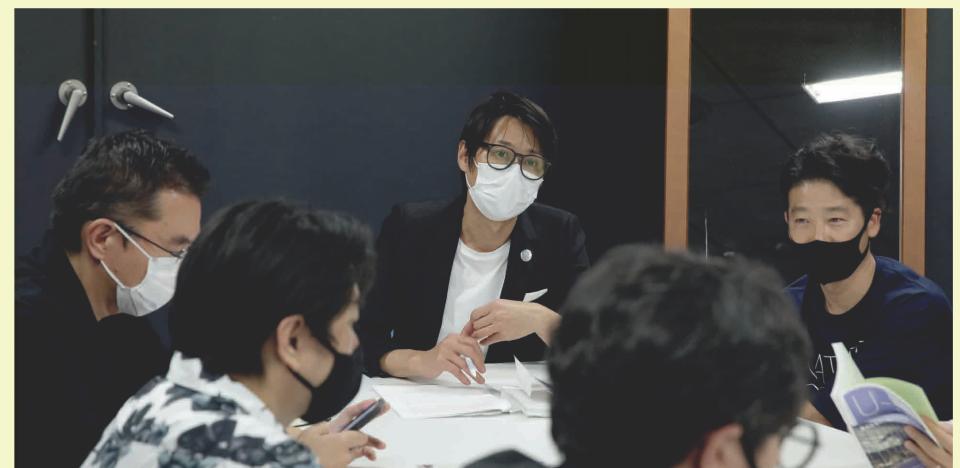
平沼：今年も1月末の週末に締め切った応募資料を土曜日にまとめ、日曜日の朝に宅配で吉村さんに届きました。翌日月曜日の朝、研究室に伺うと大きな机に仕分けされて並んでいました。

谷尻：凄い！というのかずっと見ていました？

平沼：はい（笑）。その状態から更に、4～5時間かけて悩まれ、決まった頃には日が暮れていきました。

藤本：確かに今回のメンバーは皆さん、良かったですよね。特に今年は、吉村さんの思想を感じました。

一同：うんうん、そうですよね。



—— 5年前、第1回目の「10会議」が発足され、本展のあり方を議論させていただく場で、出展者の選出方法として他薦である推薦枠を追加し、1他薦・推薦枠、2自薦・公募枠、3シード・指名枠との3枠といたしました。また一昨年の開催中、GOLD MEDALを獲られた秋吉さんから、出展者世代の方が若手の同世代の存在を多く知っているとのご助言をいただいたことから、今年も本展への出展者より各2-3名のお薦めリストをいただき、これも参考にしながら、皆様から出展候補者を選出いただきました。来年の10名による選出者の簡単な紹介を五十嵐太郎先生よりお願いいたします。(1986年4月生まれ以降の方が応募範囲内(2022年3月末日時点で35歳以下)

#### 【2022年推薦】審査委員長：芦澤竜一

- 01. 五十嵐太郎 ●佐々木慧 | axonometric
- 02. 倉方俊輔 ●石黒泰司 | ambientdesigns
- 03. 芦澤竜一 ○2022年審査委員長のため不選出
- 04. 五十嵐淳 ●森恵吾+張婕 | ATELIER MOZH
- 07. 平田晃久 ●西倉美祝 | MACAP
- 08. 平沼孝啓 ●Aleksandra Kovaleva+佐藤敦 | KASA
- 09. 藤本壯介 ●杉山由香 | タテモノトカ
- 10. 吉村靖孝 ●甲斐貴大 | studio archē

#### 【2020年推薦】審査委員長：谷尻誠

- 01. 五十嵐太郎 ●山道拓人 千葉元生 西川日満里 | ツバメアーキテクツ
- 02. 倉方俊輔 ●勝亦優祐 丸山裕貴 | 勝亦丸山建築計画
- 03. 芦澤竜一 ●山口晶 | TEAM クラブトン
- 04. 五十嵐淳 ●宮城島崇人 宮城島崇人建築設計事務所
- 05. 石上純也 ●葛島隆之 | 葛島隆之建築設計事務所
- 06. 谷尻誠 ○2020年審査委員長のため不選出
- 07. 平田晃久 ●松井さやか | 松井さやか建築設計事務所
- 08. 平沼孝啓 ●榮家志保 | EIKA studio
- 09. 藤本壯介 ●山田紗子 | 山田紗子建築設計事務所
- 10. 吉村靖孝 ●板坂留五 | RUI Architects

上記の他薦・推薦枠より2-4組、自薦・公募枠により2-4組。  
●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。

五十嵐太郎：佐々木慧さんを推薦します。「せんだいデザインリーグ・卒業設計日本一決定戦」を2006年からは地元で見てきたのですが、2010年に彼は当時九州大学にて、最終的に2位になった方です。半分狂気性を秘めた物凄くフルマリスティックなデザインの作品「密度の箱」を出してきたのが印象的で、名前は忘れていたのですが、プロジェクトは覚えていて、推薦者を探している時に彼のホームページを見てこの人だと気づきました。卒業設計展の後、藤本さんの事務所に入り、最近、独立されていたので、行方を追いたいなあと思って推薦しました。

藤本：うちにいたのですが、とても優秀でしたね。

五十嵐淳：兄貴の方も優秀なんだよ。数年前に一度、兄貴をU-35に推薦したけど通らなかった！

一同：アハハ(笑)

藤本：兄弟二人で独立してやってるんですか？

五十嵐淳：お父さんが長崎で設計事務所をされていて、二人とも九州大学に吸収された九州大学大学院芸術工学研究院の出身。二人とも学生の時に、うちにオープンデスクに来ていたので知っていました。

五十嵐太郎：ホームページを見ると卒業設計から載っているのです。本人もそれなりに自信作というか、きっと出発点だと思っているのでしょうか。

倉方：僕は、直接は知らないのですが石黒さんを推します。作品の資料を見ていると器用という言い方もできますが、店舗やプロダクトなど、他領域のデザインにも取り組んでいます。きちんと売れるだろうなという印象はもつたけれど、媚びてない印象があるのです。それぞれのいろんなスケールが融合した展示計画をしてくれることに期待して、本展がもう一段、飛躍する起爆剤になってほしいと願っています。

五十嵐淳：僕は昨年と同じ、ATELIER MOZHを推しました。

吉村：今年の応募資料の中にあった、丸いタワーの人ですね。僕は最後まで悩んでいました。

平沼：芦澤さんはどう見られるか分かりませんが、すごく優秀な方たちですね。次は平田さんお願いします。

平田：西倉さんです。SD レビューに選出した時に彼に会ったんですが癖があるんですね。結構よく喋る（笑）。喋る人を入れると面白いのではないかと思いました。坂事務所に 2 年間いたみたいで。でも彼のウェブサイトを見たら、最近建築やってなさそうなのです。オフィスの家具のプロジェクトを住宅特集か何かでやっているのですが、テーブルをぎゅっと一個にしたものでそれなりに面白いんですが、この U-35 を機会にもう少し建築をつくってほしいなと思って推しました。

平沼：僕は、今年のヴェネチア・ビエンナーレで特別表彰を受けられた佐藤さんたちです。年齢的に間に合いそうで、U-35 という場で真価を問うためにも、呼び出してみたいと思いました。

藤本：僕は、電機大から芸大に行って伊東さんのところを経て独立された方、杉山さんを推しました。神津島という島に入り込んでプロジェクトを起こしたり、ワークショップ方式の設計をされたりしていて、面白そうだな、と思って選びました。

吉村：甲斐さんは、芸大の学生時代に自分で家具制作会社を設立していて、彼の学生時代からちょこちょこ色々な所で噂を聞いていました。正直、本人が何をデザインしているのか知りませんが、面白そうなので話を聞いてみたいと思いました。



芦澤：どんな応募者が集まるのか、まったく想像できず困りました（笑）。今年、吉村さんから「調停的」と言われた話がありましたが、藤本さんがその、フワフワではなくて、シャバシャバ？

倉方：モシャモシャだな。

五十嵐太郎：バシャバシャだ！

藤本：ワシャワシャです（笑）。ワチャワチャはちょっと失敗でした、ごめんなさい。要は、漂っていると言いたい。漂っているのが、微かにまとまっているという表現です。

芦澤：そのニュアンスや喋り方が、なんて言うのか、彼らを優しいという言葉でまとめていましたが、あまりボールを遠くに投げないで、今の自分たちが向き合っている現実の少し先で議論したいと思う感覚に、僕は少しフラストレーションを感じていました。

藤本：それは僕らが、古い考えになっているのですよ。

芦澤：まあ、それもあるのですがね。

倉方：来年は展覧会会場の風景が違いますね。

芦澤：個性的というのか、色々なタイプが出てくるといいですね。

藤本：芦澤さんキュレーションは、相当、ヤバそうだよな（笑）。おもしろいかも。

吉村：芦澤さんの名前を見て、今年は、私の、僕の年だって思う人がいるでしょうね。

平沼：因みに推薦候補者を挙げ出したこの 5 年間で、100% 出展させたのは藤本さんですね。

藤本：おー、なんだかよく分からぬけど、イエーイ！（笑）

平沼：芦澤さんが 3 戦 3 勝で来てたんですが、昨年からの候補者が出来ない（笑）。

芦澤：選択肢が尽きました（笑）。

平沼：設計事務所出身者率は、ダントツ一位なのは吉村事務所出身者です。

一同：すごい。

平沼：今までの比較対象で未来は語れませんが、いろんな側面から、芦澤さんセレクトで選出いただければと思います。

芦澤：わかりました！

藤本：来年も楽しみですね！

—— それでは来年開催の議論をはじめて頂きたいと思います。そろそろこの上世代の皆様に、女性の建築家の方にもご参加をいただくような議論をいただけないかと思います。2025 年に向けて、大阪に通われている藤本先生や、京都に通われている平田先生、大阪を拠点にされている平沼先生など、関西に所縁のある方からお願ひいたします。

藤本：最近、若手サイドには毎年、女性がいるのに、世代上サイドが男ばかりであることに気づきました（笑）。

平沼：そうなんです。この数年間の GOLD MEDAL 受賞者を見返すと、中川エリカ、山田紗子、そして今日の板坂留五と、女性が選出されることが多い印象です。もちろん毎回の審査委員長が変わるので、女性最優秀に感じる側面はないし、議論や審議は公開されていますので、共有された方から何か異論があった訳でもありません。ただ上世代にも入っていただくことで、ある種同性への厳しさのような多角的な視点を持つことも大切なのではないかと思うようになりました。

藤本：女性の建築家は、下の世代も上の世代にも優秀な方がたくさん居るから、助けていただきたいことと、特に僕と平沼さんの二人は、代表理事を務めていることもあってですね・・・。

平田：何ですか？君たちは、抜けようとしているんですか？（笑）

一同：アハハ～（笑）

谷尻：（笑）なになに？自分から言わないように、言ってもらおうとしているのですか？

藤本：僕らがガ～っと喋るよりは、話の振りや交通整理の役割ができたらどうかと思うのです。

吉村：なるほど。

平沼：藤本さんとモデレートの役割をした方が良いんじゃないと思うようになったのは、太郎さんと倉方さんに、十数年来その役割を頼り切っていたことにあります。史家・批評家は本来、論じる側の役割を担っていただいた方がいいのではないかと。作家である建築家が言葉にできない事例を挙げながら持論を論じてもらいたくなりました。

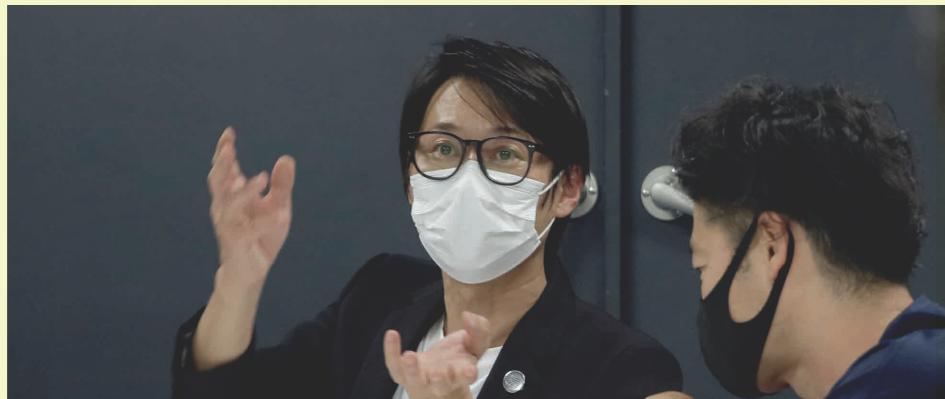
藤本：そこが上手く回るように、裏方じゃないけど、横にいて進行もできるようにがんばります！

平沼：横に居て、もちろん議論にも参加しますね。

五十嵐太郎：男性ばかりというのはこの時代異様な雰囲気もありますし、でも誰をお誘いするのかもよりますね。

平沼：いきなり全く関連がない方をお誘いしても困られると思います。開催地大阪や、本展に所縁





のある方、また建築展に興味をお持ちで理解がある方が良いように思います。活躍されている女性の方は多くおられますので、ご相談するようにしますね。ただ、僕らの世代が学んだ学生時代、建築学科にいた女性比率が確か、1割～2割と相当低かったように思います。

五十嵐太郎：僕の時は1割以下というか、同級生では1名のみでした。

藤本：本当ですか？ うちは、2割ぐらいは居たと思います。

吉村：そう、僕の代も2割くらい居たと思います。

平沼：あまり人数や比率に拘らず、まずは女性の建築家をお誘いすることから始めてみます。

平田：うんうん、いろんな意味で結構、面白くなるかも知れないですね。

倉方：歴史家や批評家は、なかなか女性で活躍されてくる方が出てこられていないようです。建築家サイドに女性が入られる中で、だんだん史家・批評家サイドにも入っていただければ視野が広がりますね。

—— ありがとうございます。また、本展のような建築展を継続的に取り組む意図のひとつとして、今後の建築展の在り方に実験的に取り組んでいきたいと感じています。50万人を超える程の「建築の日本展」に関わられた倉方先生、「インポッシブルアーキテクチャー展」に関わられました五十嵐太郎先生より、どのように建築展の在り方を模索していくべきかお話しいただけないでしょうか。

倉方：ちょうど今、京都市京セラ美術館で「モダン建築の京都展」を開催しています。森美術館で開催した「建築の日本展」の中心人物、前田さんが同じく関わっておられて、この展覧会もすごく面白いです。物が多いんです。施主の会社がどういう会社かとか、実際に使われていたインテリアを持ってきたりしていて、図面とか模型だけではなく、建築ができたことによって人々にどのような心理的影響を与えたかとか、どういう社会状況の中で作られたかがわかるようになっています。建築をつくるとか使うだけではなく、当時の社会の中でどういう見え方になったのかが浮かび上がってくるようになっています。今日の展覧会も、図面や模型というものを超えて社会的に、また受け手にとってどういう存在であるかということを展示しようとしていたと思います。そういうことが今の建築展の向かっている方向と同期する感覚だなと思いました。

五十嵐太郎：見せ方の実験を色々やったら良いと思います。国立近代美術館でやっていた隈研吾展では、アーティストが3人参加し、彼らが隈さんの作品を解釈して、紹介するパートは面白かったです。学芸員がすごく工夫したなと思いました。今日も最終的に高く評価された建築家はすごく面白い展示の方法でした。板坂さんがオープンハウスの時に喋った原稿があって、意外に前例がない。読んでいると、こんな風にぐるぐる家を回って説明した臨場感がわかつたんです。それから膨大なファイルやノートのスクラップブックもめくってみて、やはりオリジナルの建築は会場に持ってこられないけど、ある迫力を伝えられました。榮家さんも、住宅を分解して、視点場を工夫し、独特な見せ方をしていました。あとアーキペラゴの映像がうまいなあと。すごく良く撮っていました。ですので、展示の仕方も褒めてあげると、来年参加する人もきっと頑張ろうと思うと思います。もちろん本物が良いのは前提ですが、全く無関係とも思えない。やはり良い作品をつくっている人は見せ方もうまいなど今回改めて思いました。

平沼：ありがとうございます。この5年間の報告として、この展覧会でGOLD MEDALを設定し競わせることを提案してくれた太郎さんのおかげでこの会が盛り上がるようになりました。現在の他薦・自薦の仕組みが良いのだと思うのですが、毎年応募者が集まり、経過の発表をすることで意欲のある方が出してくださいました。シンポジウムはこの12年間、このメンバーでほぼやってきましたが、今後少しずつ女性の建築家にもお越しいただくことで、刺激的になるかもしれないし、いろんな要素が加わるかもしれません。

藤本：もう少し議論に時間を取りましょう。



平沼：そうですね。シンポジウムのディスカッションに重きをおいて、議論に花を咲かせましょう。

シンポジウムの開催時間は現在、4 時間です。南港の時は最大で 7 時間でした。

平田：そんなに、やってましたか（笑）。

平沼：なので 5 時間くらいにすれば良いかなとも思っています。内訳の時間を調整しながらね。

—— 最後になりましたが、引き続き今年の応募条件をこのまま、独立した U35（35 歳以下）の設計を募ります。そしてこれから応募してくる若手へ、この 10 会議の兄貴役の五十嵐淳様よりアドバイスをいただけないでしょうか。

平沼：先ほど図録のサイン会場でも、学生が淳さんのお話を非常に聞きたがっていました。今回の壇上での議論は、藤本さんや平田さんに向いていましたが。

五十嵐太郎：初めての展開でしたね。

五十嵐淳：指摘をしているときに「あなた達は正しい」と言っているように聞こえてしまうのです。僕もばっさり切っているからそれもおかしいと思っていますが、正しいって本当にそんなに言い切れるのかと思うんです。

藤本：そう聞こえた？

五十嵐淳：そう。正しさって何？って本当に思うんですが、正しかったらつまらないと思うんです。あの人たちの年齢で正しかったらさ、無茶苦茶な人たちがもっと現れて、わけの分かんないことになるかもしれない、あなただって未だにモヤモヤしたこと言っていますよね。今日言っていたのは何でしたっけ？

藤本：漂ってる。

一同：アハハ。（笑）

五十嵐淳：それはなんかさ、若い人は当然漂っているもので、それを明確に表現しろって言う方が難しいんじゃないかなって思うのです。

平田：漂っているって、若干かっこつけてるんですよね？

藤本：わはは。そうかも（笑）。

五十嵐淳：もう僕らも 50 歳にもなって、漂わせるのはやめて言語に定着させて責任感を持って発言しなきゃいけないんじゃないですか？

一同：アハハ。

藤本：漂っている、という表現は、最大の責任感を持って、彼らのやっていることを理解して説明してみたらこうなるかなと思っているだけで、別に正しいと思って言っているわけじゃないんですよ。

五十嵐淳：ああ。

藤本：こういう風に言ってみたらどうだろうかっていう仮説を、漂っているって言ってみたら何かを捉えられないかなって話ですよ。多分平田の修行というのも一緒だと思いますが・・・。

平田：修行っていうのが正しいことは到底思えないもんね。勝手に思い込みでやっているようなことですよね。

藤本：漂っているという言葉自体、わけが分からなくなってきたました。

平田：フワフワしているというのを捉えたいっていうことですよね。

五十嵐淳：伸ばすきっかけを与えるみたいな話をしてる？

藤本：そうそう、僕らも理解したいと。

五十嵐淳：それもさ、偉そうな立場じゃない？（笑）

藤本：（笑）違う、違う、偉そうにしたいわけじゃない。こういう風に言ってみたら、何かが見えるかな？と思って、言葉を探しているのです。

五十嵐淳：だからもっと勝手にやらせといたら面白いことを発見するかもしれないのに、その適当な言葉で発したアドバイスによって、変な方向に振れたらつまんなくなるのか？と。

藤本：それはアドバイスではないんです。

平田：場合によっては、そういう変な言葉に引っかかってダメになる人もいるかもしれないけれど、場合によっては、「あ、そういうことかもしれない」っていう勘違いで、別の高みに行くかもしれませんよ。

藤本：あの陶芸の彼が修行始めたらどうします？

平田：大丈夫ですよ、彼は相当強い自我をお持ちの様子でしたから。

藤本：平沼さん、僕、そろそろ、最終の新幹線に乗らないとなりません。これこそ淳さんを囲んで皆さんとお酒を飲みながらやれると一番良いんですが。来年こそはね。

平沼：はい。淳さんの発言もよく理解できますし、この情勢の好転に期待してぜひ、来年はやりましょう！



U-35 2021シンポジウム会場の様子

—— 皆さま終日にわたり、誠にありがとうございました。本日は、展覧会会場での視察にはじまり、4時間余りのシンポジウムの後、この会議の場にご参加いただき、貴重なご意見をいただき感謝しております。最後となりましたが、来年のシンポジウムは、2022年10月1日土曜日と決定しておりますので、皆さま、13年目の開催もどうかよろしくお願ひいたします。本日は、誠にありがとうございました。